

九州支部創立 50 周年を迎えて



今 任 稔 彦

本会九州支部では、今年で創立 50 周年を迎える。記念事業のための作業を進めていくなかで、思い浮かぶことを述べたい。

支部の記録によると、1957 年（昭和 32 年）に支部組織が整えられ、役員は吉村 恂支部長以下、副支部長 2 名、監査 1 名、参与 10 名および幹事 21 名の計 35 名であった。現在の支部役員の 111 名からすると、こじんまりとしたものと推測される。この 50 年の間、九州支部でも分析化学の普及、支部会員へのサービスや会員相互の親睦のためのいろいろな事業が企画され、現在に受け継がれている。九州支部は韓国や中国と地理的にも近く、また古くからの人材交流の実績もあって、早くから学術交流が行われていた。これが現在の *Asialysis* の基礎となっている。また、分析化学分野の若手の研究者や技術者の育成を目的とする取り組みが早くから行われている。1983 年には九州支部若手の会が発足し、春の講演会と夏季セミナーが毎年開催されている。特に、1990 年には九州分析化学奨励賞を制定し、業績だけにとらわれず、これから分析化学分野で活躍が期待される前途有望な大学院生や若手の研究者を表彰している。受賞された方の中には、教授、助教授に昇任されたり、大型のプロジェクト研究費を獲得して大きな発展を遂げられている方がおられ、そのような方の活躍を見聞きするにつけ、支部としての取り組みの結実の表れと大変喜ばしく思う。

100 周年を迎える次の 50 年後には分析化学がどのように発展しているだろうか。最近では分析化学の分野においても、「先端計測分析技術・機器開発事業」のような大型のプロジェクト研究が募集されている。チームを組んで行うプロジェクト研究もあるが、個人型研究も多い。“Research is individual”という言葉を残された科学者がおられることを同僚の先生から伺った。個人の独創性を伸ばし研究を遂行する点で、研究者とりわけ若い研究者にとっては恵まれた環境であるが、一方では研究費獲得の厳しい競争的環境でもある。科学技術の進歩は極めて急速で、それを catch up する研究教育、さらに独創性を引き出す研究教育には大変な工夫や努力が必要であろう。1981 年に本会の創立 30 周年記念誌として発行された「日本分析化学史」や 2002 年本誌号外の創立 50 周年記念誌に書かれた分析化学の歴史の変遷や進歩をみてわかるように、新しい分析法と呼ばれるものはある日突然に生まれたものではなく、多くの場合はその基礎となる考え方や発想があるものである。温故知新という言葉にもあるように、教職の立場にある私としては、基礎的なこと、物事の本質をしっかりと教えていきたいものである。そして、多くの先端的な計測分析技術が開発されることを楽しみにしたい。

〔Toshihiko IMATO, 九州大学大学院工学研究院, 日本分析化学会九州支部長〕